会員通信・News & Comments

魚類学雑誌
53(1): 106

新知見紹介

ヘビギンポ科クロマスク属2種 *Helcogramma inclinata* と *H. nesion* の標準和名と学名，および前者の北限記録の更新と標徴に関する新知見

Assessment of standard Japanese names of two triplefins, *Helcogramma inclinata* and *H. nesion* (Tripterygiidae), with the northernmost record and newly-recognized diagnostic characters of *H. inclinata*

本報告では，日本産ヘビギンポ科クロマスク属の2種 *Helcogramma inclinata* と *H. nesion* に適用すべき標準和名の再検討を行った．また両種の婚姻色を呈した雄の体色を，水中写真に基づき比較した．さらに，*H. inclinata* の従来の分布の北限は琉球列島であったが，鹿児島県の屋久島や薩摩半島で確認されたため，ここに付記する．

本報告で用いた標本は，鹿児島大学総合研究博物館 (KAUM-I.) に保存されている．なお，属名 *Helcogramma* の性は研究者によって扱いが異なっていたが，Williams and Howe (2003) の見解に従い，本報告では女性として扱う．本報告で引用した論文によっては *Helcogramma* を中性として扱っているが，ここでは混乱をさけるため全て Williams and Howe (2003) に従って表記した．財）鹿児島市水族館公社の山田守彦氏には貴重な写真（図4）を提供して頂いた．ここに感謝の意を表する．

吉野 (1984) は，クロマスク属の1種 *Helcogramma fuscopinna* Holleman, 1982 に対してヨゴレヘビギンポを新称として提唱し，本種が伊豆諸島以南の南日本からインド・西太平洋域に分布するとした．その後，林 (1993) は吉野 (1984) が報告した和名と分布を踏襲し，藍澤 (1997) は小笠原諸島を本種の分布域に加えて解説した．下條・林 (2000) は日本産ヘビギンポ科の再検討を行い，下顎中央の感覚管開孔数が2個であることと頭部や体に縦縞がないことの組み合わせによってヨゴレヘビギンポ *H. fuscopinna* を日本産同属他種から区別した．林 (2000) と Hayashi (2002) は，上述の2形質に加え，「雄の生時に吻部と眼下に明瞭な縦線がある」ことを本種の特徴として記載し，Hayashi (2002) は本種の日本国内における分布を「伊豆諸島から琉球列島の太平洋岸」とした．

一方，Williams and McCormick (1990) はフィリピンと台湾から得られた標本に基づき新種 *H. habena* を記載した．沖縄県粟国島をタイプ産地とする *H. inclinata* (Fowler, 1946) は，従来 *H. hudsoni* (Jordan and Seale, 1906) の新参シノニムと考えられていたが (Hansen, 1986)，Fricke (1997) や Williams and Howe (2003) によって有効種と認められ，*H. habena* の古参シノニムとされた．また，Williams and Howe (2003) は，従来インド・西太平洋域に広く分布すると考えられていた *H. fuscopinna*（例えば，吉野，1984；林，1993, 2000；Hayashi, 2002）が西インド洋の固有種であることを明らかにし，日本に分布する種を新種 *H. nesion* として記載した．したがって，繁殖期の雄で上唇前方から眼窩下縁を経て前鰓蓋骨に達する青い縦線を有するクロマスク属（=*H. fuscopinna* 類似種群；sensu Williams and Howe, 2003）は，日本に *H. inclinata* と *H. nesion* の2種が分布することになる．*Helcogramma inclinata* は琉球列島に分布し，下顎中央の感覚管開孔数が5–10個であること，第2背鰭棘数が普通15本であること，第1背鰭第1棘基底前方に1–2鱗列を有することによって他の *H. fuscopinna* 類似種群全種と識別される (Williams and Howe, 2003)．*Helcogramma nesion* は伊豆諸島，小笠原諸島および高知から採集された標本に基づいて記載されており（タイプ産地：三宅島），下顎中央の感覚管開孔数が2個であること，第2背鰭棘数が普通14本であること，第1背鰭第1棘基底前方に小鱗が1対のパッチ状に分布することによって他の *H. fuscopinna* 類似種群全種と識別される (Williams and Howe, 2003)．両種はこれらの特徴から容易に同定されるが，*H. inclinata* の生時の婚姻色が報告されていないため，体色（水中写真）による両種の比較はこれまで行われていない．

ヘビギンポ科の多くの種で，各個体の生時の体色は周辺環境や昼夜，および成長により著しく変化するが，雄の婚姻色は種内変異の程度が低い (Motomura et al., 2005)．日本産 *H. fuscopinna* 類似種群のこれまでに報告されている水中写真およびネット上で公開されている多くの水中写真を精査し，さらに第2著者の数年間におよぶ八丈島と屋久島における水中観察によって，雄の婚姻色に明瞭な2型が認められた．伊豆諸島から高知にかけて分布する雄の婚姻色は，頭部の青い線より上部，体幹部全域，および背鰭と尾鰭の基底部がオレンジ色で，体側中央部に不明瞭な黒斑が多数並ぶことなどによって特徴づけられる（図1）．これらの色彩的特長は *H. nesion* の原記載に使用されたカラー写真とよく一致する (Williams and Howe, 2003: fig. 15)．一方，日本国内では鹿児島県薩摩半島坊津から琉球列島西表島にかけて分布する雄の婚姻色は，青い線より上の頭部のみがオレンジ色で，体幹部全域および全ての鰭全域が黒色を呈し，体側中央部に不明瞭な水色の斑点が散在することなどに

図1. ヨゴレヘビギンポ *Helcogramma nesion* の婚姻色を呈する雄．伊豆諸島八丈島底土（原崎　森撮影）．頭部上半分，体幹部，および背鰭と尾鰭の基底が同色（オレンジ色）．

図2. アヤヘビギンポ *Helcogramma inclinata* の婚姻色を呈する雄．鹿児島県屋久島吉田（原崎　森撮影）．頭部上半分のみオレンジ色．体幹部および各鰭全域が黒色．青斑点が体幹部に散在．

よって特徴づけられる（図2）．これらの色彩的特長をもった1個体（KAUM-I. 34, 標準体長45.0 mm，水深3 m，原崎　森採集，2006年1月20日）を屋久島北部の一湊で採集し，精査した結果，下顎中央の感覚管開孔数が8個であること，第2背鰭棘数が15本であること，第1背鰭第1棘基底前方に1鱗列を有することによって *H. inclinata* に同定された．したがって，伊豆から四国にかけて分布し体幹部と鰭の基底部がオレンジ色を呈する種は *H. nesion* であり，鹿児島から琉球列島に分布し体幹部と鰭全域が黒色を呈する種は *H. inclinata* であると考えられる．藍澤 (1997: 560) がヨゴレヘビギンポ *H. fuscopinna* として報告した写真“ヨゴレヘビギンポ4 cm. [西表島，8 m，矢野]”は *H. inclinata* であり，“ヨゴレヘビギンポ5 cm. [高知県大月町，2 m，岡田]”は *H. nesion* である．ただし，藍澤 (1997) の写真の *H. inclinata* は通常色と婚姻色の中間で，完全な婚姻色を呈している個体ではない．益田・小林 (1994: 309) が報告した写真“①ヨゴレヘビギンポ *H. fuscopinna*”と“③アヤヘビギンポ *H. ellioti*”は両方とも婚姻色を呈した雄の *H. nesion* である．

吉野 (1984) の新標準和名ヨゴレヘビギンポは，記載や分布域から判断すると，明らかに *H. inclinata* と *H. nesion* の両種を混同したものに対して提唱されている．しかし，この標準和名提唱時に用いられた婚姻色を呈する雄の写真 (pl. 376, fig. D) は，その体色から *H. nesion* と同定される．また，下條・林 (2000)，林 (2000)，および Hayashi (2002) は，下顎中央の感覚管開孔数が2個であるものをヨゴレヘビギンポ *H. fuscopinna* としていることから，標準和名ヨゴレヘビギンポは *H. nesion* に対して適用することが妥当であると思われる．

松原 (1955) は *Lepidoblennius marmoratus ishigakiensis* Aoyagi, 1954 に対し新和名アヤヘビギンポを提唱した．益田ほか (1975) は *Helcogramma* sp. 2 に対し仮称ベニモンヘビギンポを提唱した．その後，吉野 (1984) は *L. m. ishigakiensis* と *Helcogramma* sp. 2 を同種と考え，「アヤヘビギンポ（ベニモンヘビギンポ）*Helcogramma ellioti*」として報告した．一方，Hayashi (1995) は *L. m. ishigakiensis* をタイプ標本（YCM-P 31283，標準体長46.7 mm）の調査に基づき，林 (1993) のカスリヘビギンポ *Helcogramma* sp. と同種であると考えた．その後，Fricke (1997) や Hayashi (2002) は，林 (1993) のカスリヘビギンポ *Helcogramma* sp. を *Ucla xenogrammus* Holleman, 1993 と同定した．さらに，Fricke (1997) はタイプを含めた検討をせずに *L. m. ishigakiensis* を *H. inclinata* の新参シノニムとし，*H. inclinata* の日本名をアヤヘビギンポとした．下條・林 (2000) は Fricke (1997) に従い，下顎中央の感覚管開孔数が5–10個であるものをアヤヘビギンポ *H. inclinata* とした．しかし，林 (2000) と Hayashi (2002) はアヤヘビギンポの学名を *H. ellioti* (Herre, 1944) とした．これは，アヤヘビギンポが *H. inclinata* であると報告した Fricke (1997) や下條・林 (2000) より前に出版された林 (1993) で使用されていたアヤヘビギンポ *H. ellioti* をそのまま踏襲してしまったために生じたミスであると思われる．本当の *H. ellioti* はインドとスリランカの固有種であり，従来 *H. ellioti* と同定されていた琉球列島を含む西太平洋域に分布する種は未記載種である (Randall, 2005)．この未記載種は下顎中央の感覚管開孔数が1個であるため (Randall, 2005)，感覚管開孔数が5–10個とした林 (2000) や Hayashi (2002) のアヤヘビギンポは明らかにこの未記載種ではなく，*H. inclinata* である．これらの経緯から，*L. m. ishigakiensis* の分類学的検討は今後の課題であるが，和名アヤヘビギンポがすでに *H. inclinata* に対して用いられていること（Fricke, 1997; 下條・林，2000），日本魚類学会標準和名検討委員会から原則として「日本産魚類検索：全種の同定，第二版」（ヘビギンポ科は林，2000による）を標準和名の起点とする答申があり，林 (2000) のアヤヘビギンポ *H. ellioti* は *H. in-*

図3. アヤヘビギンポ *Helcogramma inclinata*. KAUM-I. 34, 標準体長45.0 mm, 鹿児島県屋久島一湊, 原崎森, 2006年1月20日（本村浩之撮影）.

elinata であることから，和名の安定性および変更に伴う混乱を避けるために，標準和名アヤヘビギンポは *H. inclinata* に対して適用することが妥当であると判断した．なお，林 (1993, 2000) と Hayashi (2002) は，アヤヘビギンポの側線有孔鱗数を70枚としているが，これはヘビギンポ科では考えられない数である（例えば，*H. inclinata* では26–35枚；Williams and Howe, 2003）．おそらく，松原 (1955) のアヤヘビギンポ *L. m. ishigakiensis* が「縦列鱗数およそ70枚」と記載されているところから誤って「側線有孔鱗数が70枚」としたものと思われる．また，林 (2000) と Hayashi (2002) は「アヤヘビギンポの頭部には明瞭な縦線がない」としているが，これは縦縞が消失した標本を観察したためと思われる．

Fricke (1997) は林 (1993) の *H. ellioti* を *Helcogramma* sp. 7 とした．このsp. 7はRandall (2005) の *Helcogramma* sp. と同種であり，下顎中央の感覚管開孔数が1個 (Fricke, 1997; Randall, 2005) であるため，感覚管開孔数が5–10個である林 (1993) の *H. ellioti* は Fricke (1997) の *Helcogramma* sp. 7 ではない．松原 (1955) は，「体に斜後下方に傾いた8条の暗褐色の横帯がある」種を *Tripterygion inclinatus* (=*H. inclinata*) とし，ナナメヘビギンポを新称として提唱した．しかし，現在この特徴をもつ種は *H. hadsoni* とされていること，和名は学名ではなく種の実体に対応することから，下條・林 (2000)，林 (2000) や Hayashi (2002) らの措置（ナナメヘビギンポの *H. hadsoni* への適用）は正しい．

アヤヘビギンポ *H. inclinata* は従来琉球列島が分布の北限であるとされていたが (Williams and Howe, 2003)，第2著者の水中観察によって鹿児島県の屋久島でも繁殖行動を行っていることが明らかになった．屋久島一湊から得られた標本（KAUM-I. 34，標準体長45.0 mm；図3）は，アヤヘビギンポの標本に基づく北限記録である．また，鹿児島県薩摩半島の坊津でアヤヘビギンポと同定される魚が撮影された（図4）．アヤヘビギンポとヨゴレヘビギンポの分布の境界線がどこにあるのか，あるいは両種が共存している場所があるのかを明らかにするために，宮崎県と大分県での今後の調査が期待される．

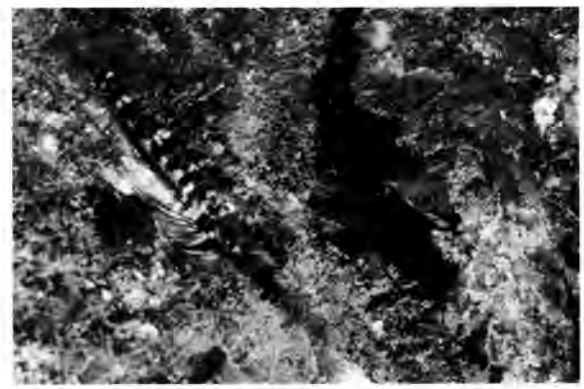

図4. アヤヘビギンポ *Helcogramma inclinata*. 鹿児島県薩摩半島坊津（山田守彦撮影）.

引用文献

藍澤正宏. 1997. ヘビギンポ科. 岡村 収・尼岡邦夫（編・監修）, pp. 559–560. 日本の海水魚. 山と渓谷社, 東京.

青柳兵司. 1954. 琉球列島産ギンポ科魚類の新・珍種追記. 動物学雑誌, 63: 239–242.

Fricke, R. 1997. Tripterygiid fishes of the western and central Pacific, with descriptions of 15 new species, including an annotated checklist of world Tripterygiidae (Teleostei). Koeltz Scientific Books, Königstein. ix+607 pp.

Hansen, P. E. H. 1986. Revision of the tripterygiid fish genus *Helcogramma*, including descriptions of four new species. Bull. Mar. Sci., 38: 313–354.

林 公義. 1993. ヘビギンポ科. 中坊徹次（編）, pp. 944-948, 1351. 日本産魚類検索 全種の同定. 初版. 東海大学出版会, 東京.

Hayashi, M. 1995. Catalogue of fishes of Yokosuka City Museum (III)—Dr. Aoyagi (Ikeda)'s fish collection. Misc. Rept., Yokosuka Mus., (20): 1–70.

林 公義. 2000. ヘビギンポ科. 中坊徹次（編）, pp. 1077–1086, 1600–1601. 日本産魚類検索 全種の同定. 第2版. 東海大学出版会, 東京.

Hayashi, M. 2002. Tripterygiidae. Pages 565–595, 1519–1522 *in* T. Nakabo, ed. Fishes of Japan with pictorial keys to the species. English edition. Tokai Univ. Press, Tokyo.

益田 一・荒賀忠・・吉野哲夫. 1975. 魚類図鑑 南日本の沿岸魚. 東海大学出版会, 東京. 379 pp.

益田 一・小林安雅. 1994. 日本産魚類生態大図鑑. 東海大学出版会, 東京. 465 pp.

松原喜代松. 1955. 魚類の形態と検索. 1. 初版. 石崎書店, 東京. xi+789 pp.

Motomura, H., S. Harazaki and G. S. Hardy. 2005. A new species of triplefin (Perciformes: Tripterygiidae), *Enneapterygius senoui*, from Japan with a discussion of its *in situ* color pattern. Aqua. J. Ichthy. Aquat. Biol., 10: 5–14.

Randall, J. E. 2005. Reef and shore fishes of the South Pacific: New Caledonia to Tahiti and the Pitcairn Islands. University of Hawai'i Press, Honolulu. xii+707 pp.

下條敦夫・林 公義. 2000. 日本産ヘビギンポ科魚類の7未記録種. 横須賀市立博物館研究報告（自然科学）, (47): 39–58.

Williams, J. T. and J. C. Howe. 2003. Seven new species of the triplefin fish genus *Helcogramma* (Tripterygiidae) from the Indo-Pacific. Aqua. J. Ichthy. Aquat. Biol., 7: 151–176.

Williams, J. T. and C. J. McCormick. 1990. Two new species of the

triplefin fish genus *Helcogramma* (Tripterygiidae) from the western Pacific. Copeia, 1990: 1020–1030.
吉野哲夫．1984．ヨゴレヘビギンポ（新称）．益田　一・尼岡邦夫・荒賀忠一・上野輝彌・吉野哲夫（編），p. 456（解説），pl. 376-D（図版）．日本産魚類大図鑑．東海大学出版会，東京．

（本村浩之　Hiroyuki Motomura：〒890–0065　鹿児島市郡元1–21–30　鹿児島大学総合研究博物館　e-mail: motomura@kaum.kagoshima-u.ac.jp；原崎　森　Shigeru Harazaki：〒891–4205　鹿児島県熊毛郡上屋久町宮之浦1559–1　森と海　e-mail: info@mori-umi.net；瀬能宏　Hiroshi Senou：〒250-0031　神奈川県小田原市入生田499　神奈川県立生命の星・地球博物館　e-mail: senou@nh.kanagawaw-museum.jp）

魚類学雑誌
53(1): 109

益田　一さんの思い出
Memories of Mr. Hajime Masuda (1921–2005)

2005年12月8日，本会名誉会員の益田　一さんが，療養先だった熱海のケアホテルで逝去されました．享年84歳でした．ご親族の方のお話では，春からずっと体調もよく，お元気に過ごされており，前日も親戚の方と他愛もない馬鹿話をするなど，いつもとまったく変わらないご様子だったとのこと．最近の益田さんは朝食後に一眠りされるのが常だったそうで，その日はあろうことかそのまま脳梗塞で帰らぬ人となられたそうです．本人はまだ逝ってしまったことに気がついていないんじゃないかなと，お通夜の席でご親族の方から冗談がでるほど安らかに旅立たれたと伺いました．

この年の3月10日頃だったと思いますが，益田さんから一本の電話がかかってきました．前月より体調を崩されて入院し，退院したばかりであると伺っていたので，外来魚問題に振り回されて編集が大幅に遅れていたI.O.P. Diving News（伊豆海洋公園通信）（以下，IOPニュース）のことでお叱りを受けるのかなと思いきや，今後のことでいろいろ相談したいことがあるのですぐに来いという電話でした．3月16日に会社の事務所を兼ねている伊東市八幡野のご自宅をお訪ねすると，出迎えていただいた娘の安規子さんが玄関先で「父はすっかり変わってしまったので驚かないでくださいね」とおっしゃられ，リビングに通されました．隣室のベッドから起きてこられた益田さんは，以前の面影はなく，ひどく痩せて小さく見え，腰掛けているのもつらそうでした．ただ，目だけは鋭く光り，何か覚悟があることを直感的に感じることができました．

益田さんは挨拶もそこそこに「今回ばかりはもうだめだ．明日死んでもおかしくない状態．海洋公園のダイビング事業もすべて手を引いた．IOPニュースは会社の事業としてはもう発行できないが，きりを付けるのにしばらく続ける必要があるなら資金はなんとかする．どうするかこの場で決めてくれ」と矢継ぎ早におっしゃられたのです．私は益田さんのただならぬ様子に圧倒され，「これを機にすっぱりやめましょう」と返すのが精一杯でした．そして海洋公園に所蔵されていた標本類についても，一週間後にすべて私が所属する博物館に移管することが決定されたのです．長きにわたって心血を注ぎ，積み重ねてきたことに終焉の決断を下す経営者益田　一の凄みを感じた瞬間でした．その直後，「IOPニュースの発行をこれまで継続できたのは瀬能くんのおかげ，ありがとう」と言っていただいた時には打って変わって穏やかな目をされていたのが印象的でした．

私が益田さんに初めてお会いしたのは1983年5月半ばのことでした．同年4月に琉球大学大学院の修士課程に入学したばかりでしたが，指導教官の吉野哲夫先生から益田さんが沖縄の魚を撮影に来るから採集をお手伝いするようにと命じられたのです．この頃の益田さんは「日本産魚類大図鑑」（東海大学出版会，1984年）の制作のための取材に全国を飛び回っておられ，世界最大規模の図鑑の出版を実現させるべく燃えに燃えていた時期ではなかったかと思います．私も魚さえ採集していればハッピーでしたし，修士論文の材料となるボラ科魚類の標本を集める目的もあったので，二つ返事で益田さんのお手伝いをすることになりました．この時は5月下旬から6月上旬にかけて石垣島と西表島で採集を行いました．益田さんには助手として小野篤司さんが同行されており，益田さんらが海へ行っている間，私と小野さんがマングローブなどを中心に川を回り，多くの未記載種や日本初記録種の魚類を採集することができました．この大図鑑の企画は，日本産の魚類全種をカラーの標本写真付きで掲載するというものだったので，ちょうど追い込みにかかっていたこともあり，同年の9月上・中旬には再び八重山で採集を行い，さらに10月の中旬から11月下旬にかけては九州をぐるりと一周して採集して回るという強行軍でした．この年の3回にわたる採集旅行に同行できたことは，私にしてみれば図鑑作りの裏側を垣間見たようで実に印象深く，貴重な体験でした．今日ではあたりまえのように行われている採集から撮影までの一連の作業をプロのレベルで知ることができたのもこの時の収穫でした．

当時の益田さんは，「ステーキ」を年不相応にもりもり食べる大食漢，「タバコ」を立て続けに吸うヘビースモーカー，そして「砂糖をたっぷり入れたコーヒー」を何杯もお代わりしながら何時間でも魚の話に興じる気さ

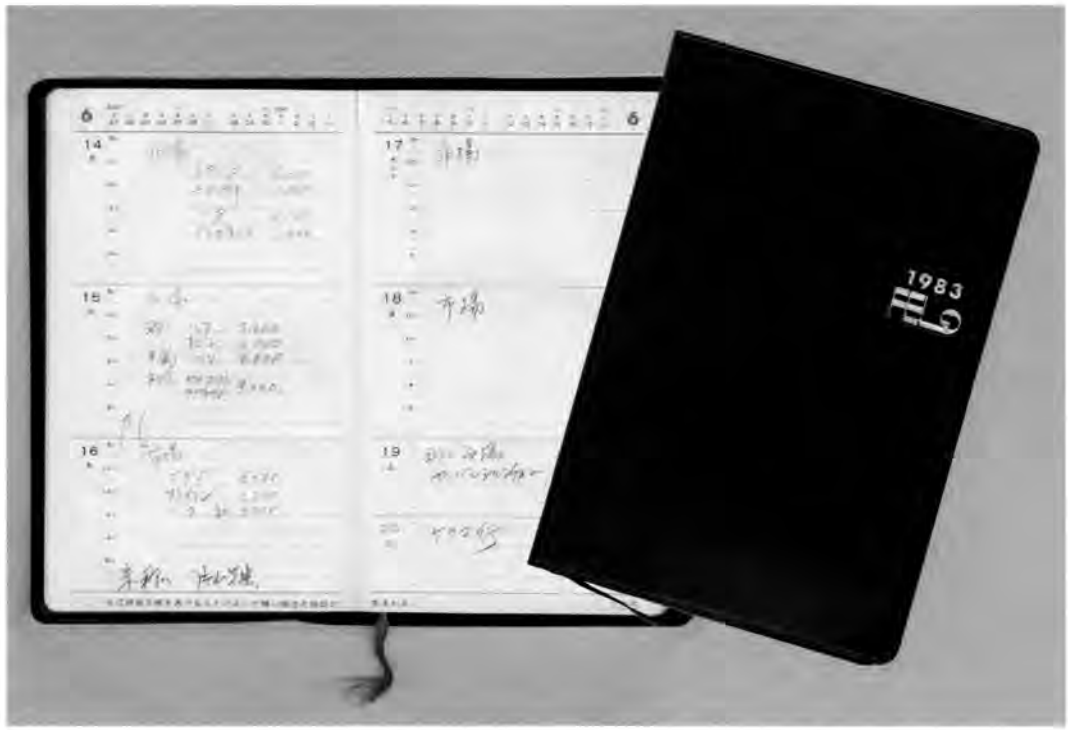

図1. 益田氏が日本産魚類大図鑑の取材を行っていた時期の手帳．1982（左）年と1983年（右）．氏は62歳の誕生日（1982年6月18日なので実際には61歳；62歳の時には東京におられた）に西表島のマングローブで“だぼはぜ”を追いかけていたと雑誌のインタビューに答えているが，沖縄島で魚市場回りをされていたことがわかる．西表島での取材はこの少し前のことで，マングローブの泥の中に潜む“だぼはぜ”の美しさが余程印象深かったのか，氏の記憶を混乱させていたようだ．

くな先生という印象でした．益田さんは大柄ですが一滴もお酒を嗜まれず，甘いものが大好きな方でしたが，益田さんの祖父の兄にあたる益田鈍翁（本名益田　孝；三井財閥を作り上げ，千利休以来の茶人と呼ばれ，希代の古美術コレクターでもあった人物）もそうだったと言いますから血は争えません（ただし，若い頃に横須賀でバンドを組んでおられた時にはかなり飲まれていたという情報がありますが…）．益田さんのヘビースモーカーぶりは相当なもので，明仁殿下（現天皇陛下）との会談の際に，同行した荒賀忠一先生や吉野先生らも同様にタバコを切らさない方々だったため，侍従の方が慌てて窓を開けたという逸話があるほどです．当時の私は益田さんが三井財閥の末裔らしいということしか存じ上げませんでしたし，私自身がスキューバダイビングの世界とはまだ無縁だったこともあって，当然のことながら実業家としての益田さんの素顔を知る由もありませんでした．

益田さんは生涯に多くの出版物を手がけられましたが，中でも「魚類図鑑：南日本の沿岸魚」（東海大学出版会，1975年）と上述の「日本産魚類大図鑑」は特筆に値するものです．前者は益田さんを筆頭に荒賀先生と吉野先生の3人の共同著作で，益田さんは図鑑に使用する魚の標本写真の大半を提供されました．この本は益田さんにとって初めての本格的な専門書であり，この分野における益田さんの地位を確固とするものではなかったかと思います．なにしろ1252種もの魚類をカラーの標本写真で紹介し，そのうち新種や未記載種，日本初記録種がなんと151種も含まれているというのですから当然と言えるでしょう．しかも図版のデザインや解説の英文と和文の文字色の使い分けも斬新で格好がよく，一目見て欲しくなる本でした．多くの研究者が日本の海には未開の荒野が広がっており，その開拓のためにはスキューバダイビングの技術，そして展鰭された標本と生鮮時の色彩を記録した写真が必要不可欠であることを思い知らされたのもこの本だったのではないでしょうか．このような図鑑の出版は当時としては画期的なことであり，ビショップ博物館のランドール博士にも驚きと賞賛を持って迎えられたと聞き及んでいます．

「南日本の沿岸魚」が足がかりとなり完成した「日本産魚類大図鑑」は，益田さんにとって集大成とも言うべきもので，益田さんが筆頭編者として参加されていなければ実現不可能な出版企画でした．日本産の魚類全種を収録するためには多くの研究者が執筆することになりますが，良くも悪くも研究の世界には派閥やなわばり意識みたいなものがあります．「あいつが参加しているなら俺は協力できない」とか，「あいつの弟子が著者になる

なら俺の弟子も入れろ」などと勝手なことばかりいう研究者がいるのではないかと大いに心配されたのです．そこで，「じゃあ，あの先生にお願いする分については益田さんに行ってもらいましょう」となるわけです．先に述べたように私はまだ大学院生になったばかりの頃で，魚類学会の裏事情などよく知りませんでしたが，そんな話を何度も耳にした記憶があります．実際，益田さんの人間的魅力は半端でなく，行く先々で誰とでもすぐに仲良くなってしまい，ご自身の人脈に取り込んでしまわれる能力には本当に驚かされました．

「日本産魚類大図鑑」ほどの図鑑になると，掲載される写真もおびただしい数になります．手元にけっこうな数の写真をストックしている研究者もおられたようですが，研究対象が絞り込まれていて網羅的でなかったり，処理しやすい小さな魚がほとんどで，魚市場に水揚げされる大きな魚，つまり食用となる普通の魚については大部分を新たに撮影する必要性があったようです．益田さんが取材で沖縄に来られた際，八重山行きの合間に沖縄本島の魚市場も毎朝のように回られていましたが，ハタのように大きくて高価な魚をすべて購入してくるわけにもいきません．そこでどうするかというと，競りにかかる前の魚をトロ箱から引っ張り出して発泡スチロールの板の上に載せ，短いはりすを付けた釣り針を鰭の裏側に引っかけて引っ張ることで鰭を立て，その状態のままはりすの先に作った小さな輪っかを画鋲で板に留めるのです．背鰭2箇所と腹鰭，臀鰭をこの方法で引っ張れば，売り物の魚に傷をつけることなくバックを白く処理して撮影することができます．益田さんはこの方法で魚市場の魚の写真を片っ端から撮影されていました．ただ，いくら魚に傷を付けないとは言え，普通の人だったら初対面で許可されるはずもなく，益田さんならではの撮影術だったと思います．ちなみに件の図鑑には，この時の釣り針が残ったまま切り抜かれて掲載されている写真がいくつかあることを付記しておきましょう．

1990年4月，学位は取れたものの行く当てのないままだった私は，一大決心をして益田さんの会社でお世話になることになりました．私と益田さんの関係は，この時から社員と社長になったのです．当時，バブル経済の余韻がまだ残っており，伊豆海洋公園にダイバーが集う海洋文化の情報発信基地を作って様々な事業を展開する．その中で魚の研究や図鑑の出版なども行っていくという計画が進行していました．そんな話を益田さんは品川のホテルで夕食を取りながら私にしてくださいました．それならばぜひ私を雇っていただけないだろうかというようなことをその場でお願いしたように思います．とにかく行き先が決まったことで，慌ただしく東京を離れることになったのです．伊豆海洋公園ダイビングセンターは，当時は（株）伊豆センチュリーパークの事業所で，益田海洋プロダクションがその運営を委託されていました．ここで過ごした3年半の間に，私は経営者としての益田さんを知るところとなりました．外からは派手で楽しそうに見えていた研究活動や出版活動ですが，益田さんはそれらを趣味や道楽の延長ではなく，すべては会社の事業として位置づけておられたのです．

益田さんがなぜ海に魅せられ，スキューバダイビングの世界に傾倒していったのか，それは海中世界の美しさに対する感動はもちろんのこと，未知のものへのあこがれや探求心にあったことは間違いありません．その一端は，畑　正憲氏との共著「日本の海洋動物：深海90 mまで」（学習研究社，1969年），岡田弥一郎氏が監修した「続日本の海洋動物：南海の生態」（学習研究社，1970年），そして阿部宗明氏との共著「日本列島の魚」（毎日新聞社，1972年）といった初期の著作から窺い知ることができます．特に，「日本の海洋動物」に畑氏が寄稿されている「海をかたる：海底探訪記」は，黎明期の海洋公園でどのようなダイビングが行われていたのかが詳述されており興味深いものです．しかしながら，それで飯が食えるのかと言えば，そう簡単にはいきません．中でも図鑑のような出版活動は，業績として評価される一方で，それだけではきわめてコストパフォーマンスの低い仕事です．ましてやターゲットとなる研究者やアクアリストの数などたかが知れており，作っても売れなければそれは自己満足に過ぎず，趣味や道楽と言われてしまいます．

益田さんのとった行動は明快でした．レジャーダイビングの目的を「潜水技術の探求」や「海中散策」から，生物を観察する「フィッシュウォッチング」に変えてしまったのです．ライセンスを取ったダイバーは最初こそスキルを磨いたり，海中での浮遊感などに満足してリピートするが，ある程度のレベルに達すると目的意識を失いドロップアウトしてしまう．だが自分のこれまでの経験から明らかなことは，生物の世界は限りなく奥が深く，極めることは困難である．ならば生物の観察をダイビングの目的にすれば，ダイバーをいつまでもつなぎ止めることができるだろう．益田さんは社員はもとより，会社を訪れる業界の方々にご自身の考えをいつも力説されていました．これが見事に功を奏して，器財メーカーから出版社，ダイビングショップ，リゾートに至るまで，業界をあげて「フィッシュウォッチング」が合い言葉になりました．もちろん出版事業だけで生活が成り立つほど甘い世界ではありませんが，少なくとも魚類の採集や研究を趣味や道楽ではなく，事業の一部として位置づけるためのマーケット作りに成功したのです．趣味を押し通すために世の中を曲げてしまったとも言えますが，こんなことができる人は魚類学の世界にはいませんし，やはり超一流の経営者であり，だれもが好感を抱くカリスマ性を兼ね備えていた益田さんだからこその仕業でしょう．

フィッシュウォッチングと関連して益田さんが力を注いだ事業にIOPニュースの出版がありました．益田さんは学術の世界との関わりにおいて，ご自身は一歩引き，

専門の研究者を前に立てることを常とされてきました．筆頭著者となっている「南日本の沿岸魚」でさえ，種の解説は荒賀，吉野両先生が担当されたことは同書の序文にあるとおりです．ご自身が著者となられた図鑑やガイドブックは，いずれも専門書というよりはダイバー向けの普及図書でした．その意味で，IOPニュースは益田さんが学術の世界へ本格的参入を目指した初めての試みではなかったかと思います．創刊当初，益田さんはレジャーダイバーの視点を重視した広報誌的内容を目指しておられましたが，私が編集を引き継いでからは方針転換して研究者も必要とする情報を掲載するようになりました．海洋文化の情報発信基地が行う事業としてふさわしいとの見方もあり，当時としてはこの冊子にかける期待も大きかったと記憶しています．生物の研究にはお金がかかるしさっぱり儲からないけれども，自力で研究成果を公表し，それが会社のイメージアップにつながり，ついでに多少なりとも利益が出るならと，考えておられたのかも知れません．

私は1991年3月に発行されたVol. 2，No 4以降，廃刊になるまでIOPニュースの編集をさせていただきましたが，当初はあの手この手である程度の読者を確保できたものの，時が経つにつれて一部の研究者や熱心なダイバーからの高い評価とは裏腹に販売部数は減る一方だったようです．もちろんこれは営業の問題だけでなく，編集を全面的に任されていた私にも責任があるわけですが，利益にならないことをするはずもない益田さんがなぜ打ち切ることなく出版を継続されたのか，今となってはその真意を聞くことができなくなってしまいました．イメージアップのための広告宣伝費と考えるにはあまりにコストがかかりすぎる代物だったのです．

私は1993年9月をもって益田さんの会社を退社しましたが，白状すれば，当時，海洋公園を海洋文化の中心基地に据える計画は，バブル経済の破綻とともに雲散霧消しており，私は当面の目標を見失っていました．親会社が史上最大の負債を抱えて明日をも知れぬことが発覚，益田さんはそんな状態でも堅実な経営手法でご自身の会社に飛び火する前にその危機を乗り越えられました．その最中で海洋公園を去ることは，益田さんや当時一緒に働いていた同僚を裏切ることになるという気持ちが私の中にありました．ですから，IOPニュースだけは退職後もなんとかお手伝いさせて欲しいと益田さんに願い出たのです．振り返れば，益田さんが取り組んできた数々の事業の中で，これだけは儲からずに失敗したと思われていたのではないでしょうか．ただし，賛否両論，功罪ある中で，「先達に聞く」（本誌，52巻1号）のインタビューでは功の部分が多いともおっしゃっておられましたので，お金は使ったけれどもまあしゃあないかと，今頃苦虫を噛み潰しておられるかも知れません．

晩年，益田さんは愛弟子の小林安雅さんと共著で「日本産魚類生態大図鑑」（東海大学出版会，1994年）を上梓されました．この本はそれまでに出版された普及図書とは明らかに趣向が異なりました．日本からは正式に記録のない魚類や，初めて図示される成長段階など，オリジナルな内容が積極的に盛り込まれたのです．生態写真による図鑑のパイオニアとして，研究者との共同作業からの脱皮を目指されたのかも知れません．これまでのスタンスと明らかに異なる益田さんの方針に対して，私は社員であることも顧みず，研究者としてその内容に辛辣な意見を申し上げたりもしました．さらに益田さんは「海洋生物ガイドブック」（東海大学出版会，1999年）においても海産無脊椎動物に多数の新和名を提唱するなど，ここでもまた新しい取り組みをされています．レジャーダイバーには歓迎される一方で，このことが原因となり，一部の研究者と軋轢が生じたことも事実です．IOPニュースの出版を継続された一方で，益田さんがどのようなお考えの基にこれら2冊の本を世に送り出されたのか，今となっては知る由もありませんが，仕事が遅く，何かと閉鎖的な日本の研究者への怒りのメッセージだったのかも知れません．

不世出という形容がぴったりの益田さんですが，それは裏を返せばご自身の完全なる後継者がついに現れなかったということでもあります．人生のすべてをかけてきたダイビング事業と海洋生物への取り組みを，最後にすべて精算されたことは，経営者として潔いと評価されるかも知れません．しかしながら，正直に，誤解を恐れずに申し上げるならば，この点についてはきっと益田さんは心残りだったのではないかと私は思っています．でもご安心ください，益田さん．海洋公園からは水中映像やダイビング，生物研究の世界で活躍する多くのお弟子さんが育ちました．益田さんの遺志はそれぞれの分野で確実に受け継がれていくことと思います．益田さんから見れば皆頼りないと思われるかも知れませんが，天上から暖かく見守っていただければと思います．

最後になりましたが，魚類学はもとより海洋文化の進歩と普及に偉大な足跡を残された益田さんのご冥福をお祈りいたします．

参考資料

林　公義．2005．インタビュー　先達に聞く．魚類学雑誌，52: 62–74.
※幼少から晩年まで，益田氏自らが数々のエピソードを語る．
松浦啓一．1991．I.O.P. Diving News（伊豆海洋公園通信）．魚類学雑誌，38: 88–89.
※I.O.P. Diving Newsの位置づけについては，上記と合わせてI.O.P. Diving News，9(7): 20を参照されたい．
瀬能　宏．1993．伊豆海洋公園の紹介．魚類学雑誌，40: 283–286.
※伊豆海洋公園と益田海洋プロダクションの歴史を詳述．
白崎秀雄．1998．鈍翁益田孝（上）．中央公論社，東京．402 pp.
白崎秀雄．1998．鈍翁益田孝（下）．中央公論社，東京．424 pp.

※益田氏の祖父の兄である益田鈍翁の伝記．益田氏が三井財閥を作り上げた益田鈍翁（本名は孝）の末裔であったことは最近の魚類研究者にはあまり知られていない．

田代紀子・宇都宮　浩編．2006．水中写真のパイオニア・益田一氏追悼特別企画—ありがとう益田一先生．月刊ダイビングワールド，32(3): 138–143.

※一番弟子の中村宏治氏を筆頭に，写真家，インストラクター，編集者，元社員など，益田氏ゆかりの人たちがそれぞれの立場で思いを寄せている．

富永義昭．1976．Coastal fishes of southern Japan. Hajime Masuda, Chuichi Araga, and Tetsuo Yoshino. 1975. Tokai Univ. Press, Tokyo, 379 pp., 143 pls., 11 figs. ¥15,000. 21×30.5 cm.（魚類図鑑—南日本の沿岸魚．益田　一，荒賀忠一，吉野哲夫．東海大学出版会，東京）．魚類学雑誌，22: 246–250.

※益田氏の代表的出版物「南日本の沿岸魚」の書評．写真に簡単な解説を付けてインスタントラーメンのように図鑑（的写真集）が乱造される昨今，学会のご意見番だった故　富永義昭博士による徹底した書評は戒めとして胸に刻んでおきたい．

鷲尾紘一郎．1987．評伝 フィッシュウォッチングのドン 益田一．スキンダイバー・ジャパン，Vol. 1（創5月号増刊），142–149.

※益田氏のルーツと生い立ちを知るには最適の資料．氏の経営哲学や人生訓にまで言及している好著だが，掲載誌は廃刊となっており，国会図書館にも収蔵されておらず，入手が困難（必要な方は電子メールにて筆者までご連絡ください）．

（瀬能　宏　Hiroshi Senou：〒250–0031　神奈川県小田原市入生田499 神奈川県立生命の星・地球博物館　e-mail: senou@nh.kanagawa-museum.jp）

会記・Proceedings

魚類学雑誌
53(1): 113

2005年度第5回幹事会

日　時：2005年12月1日　13:30–17:30
場　所：北海道大学大学院水産科学研究院
出席者：西田，松浦，宗原，今村，矢部，甲斐

1. 会務報告　会長：魚類学会から2件（*Ichthyological Research* の刊行助成，および研究成果公開促進費）の科学研究費申請を行った旨報告があった．
   会計：学会事務センターから引き継いだ未収金について報告があった．今年度末に雑損として精算することが提案され，了承された．また，2005年度の魚類学雑誌の広告収入が0円であったため，会計幹事を責任者とする広告集めの体制を作ることとなった．団体会員については，公費支払いの都合上，4月以降特別請求を行うことになった．
2. 2005年度年会実行委員会より提出された資料をもとに，ウェブ上での年会参加申込，振込用紙の送付方法，問い合わせの対応などについてのトラブルとその対処方法に関して議論した．
3. 後藤　晃自然保護委員長より，希少タナゴ類採集行為者の入会希望への対処案について，状況説明と検討経過報告があった．今後，答申にもとづき，評議委員会に諮ることになった．また，入会資格と審査についての細則改訂を今後検討していくこととなった．
4. 会長より2006年度学会業務委託契約書案について報告があり，内容について検討した．
5. 会務報告の会員用ウェブページ公開が予定されているが，これに伴い，パスワードの問い合わせが増加することが予想されるので，パスワードの変更することとなった．*Ichthyological Research* 53 (1) 発送時に新パスワードを記した折り込み紙を入れ，4月1日より変更することで了承された．
6. 2006年1月からの庶務幹事2名と会計幹事2名の交替に伴い，1月に幹事会を行って年間スケジュールの確認等を行うこととなった．
7. その他　男女共同参画学協会連絡会への参加要請があり，まずは採決権を持たない「オブザーバー学会」として参加することを評議委員会へ諮った上で，進めることになった．魚類学会から「魚の会」の簑島清夫氏へ贈呈する感謝状ついて，作成方法，贈呈方法などが論議された．

2006年度第1回幹事会

日　時：2006年1月11日 13:00–16:00
場　所：京都大学フィールド科学教育研究センター
出席者：松浦，西田，奥田，甲斐，波戸岡，北川

1. 2006年度より庶務幹事2名，会計幹事2名が交代した．会長より新メンバーに対して幹事会の運営に関する説明があった．
2. 2005年度末に行われた電子情報委員会と国際文献印刷社との会議について，庶務幹事より報告があり，年会メーリングリストと年会申込のウェブ登録，システムに関する説明がなされた．
3. 2006年度の学会運営に関わる年間行事予定が確認され，年会に向けた準備日程表が作成された．
4. 魚類学雑誌の広告収入拡大に向けて，会計幹事を責任者と